3　清医胡桃新の『胡氏方案』について

○郭[1]　秀梅・岡[2]田　研吉

『胡氏方案』は、享保三年（一八〇三）に来日した清医胡桃新の長崎における治療医案であり、現在、松江日赤病院附属図書館に架号四五として所蔵されている。本書は原脊氏による写本五冊であり、以下の内容からなる。「胡氏方案巻之一」「胡氏方案巻之二」「胡氏方案巻之三」「胡氏方案巻之四、胡氏方案拾遺」「問答、奥書」つまり、原脊と胡桃新との問答及び原脊が文化甲子冬日に書いた奥書である。

さて、胡桃新について前回と前々回の医史学会で既に報告したが、原脊その人は『崎舘箋臆』『清客筆語』によって藍川玄慎であることが分かった。この『胡氏方案』は文化元年（一八〇四）九月から十二月にかけて、藍川玄慎が医官の吉田長達・千賀道栄・小川文庵と共に、長崎へ胡桃新に遊学した時に、編集されたものである。藍川玄慎は三人の医官に続いて、文化二年二月に長崎を発って帰国した。同年四月、江戸藩邸において御医師、十人扶持で登用された。『胡氏方案』には胡桃新の長崎における治験の一七二例、延べ四九四回を収めている。そして、受診の日付を明白に記し、病人の氏名もほぼ書いてある。ほとんど日本人である。日付から、文化元年二月二日から十二月二十七日の間の病例であることが明らかになっている。これは胡桃新の治療の全部ではないけれども、原脊が「毎見高案必随写随誦、帰必復誦」と語るように、胡桃新の医術をまとめたもので、これから内容を知ることができる。疾病では内科、婦人科、外科、小児科など各科に属す。胡桃新は得意な技をこなして、難病、持病をよく治している。『胡氏方案』によると、長川政八は八歳から腹痛を患い、あらゆる治療を尽くして一応治った既往歴があった。一七歳の秋（一八〇三）、生魚を食べたあと、発作を起こした。治療しても効き目がない。翌年二月二十二日、三月七日、胡桃新の治療を受けた。一回目の処方は和血、通絡、順気を主として、二回目の処方

は和中、調気、養血であった。この二処方で政八の腹痛は全癒した。胡桃新は前医の平胃健脾の常法と異なる通血絡、順稟気の方法を用い、政八の十年も抱えた疾病を忽ち平復させたことで、当時、奇手という評判を受けたのである。

胡桃新は長崎奉行成瀬因幡守の許可を受け、文化元年二月より、毎月二・七の日を聖福寺、崇福寺へ診療出張し、月に六日間、市中の診療を行った。九月以後は毎月四・九の日が医官達の入唐館日と定められた。しかし、この『胡氏方案』によると、二月から七月までの胡桃新の診療日は奉行の指定した日数よりずっと多かった。四月の一ヶ月に十二日間出診し、九十七回診療記録を残している。かなり繁忙の日々であったことが推測される。八月以後は決まった出張日にだけ行くようになり、診療記録も著しく減少した。恐らくその時、四・九の日に医官達と対話があるから、出掛けられなかったのであろうか。

第五冊における問答と奥書によると、胡桃新は当時、友人の程赤城の家に寄寓して、聖福寺と崇福寺で、診療を行った。患者の数は数え切れないほど多く、効いた例は枚挙にいとまなく、その名が江戸まで聞こえていた。また、長崎尹の治療方案がしばしば幕府に進呈されたため、清医の医技が頗る奇特と認められていた。その故に、医官達が長崎へ胡桃新に学ぶために派遣されたことが分かった。

演者らの新たに発見した清医胡桃新に関する資料により、胡桃新が一年半の滞在中に大きな活躍をしたことが裏付けられた。それだけでなく、資料は当時の医学状況及び中日医学の比較研究に非常に価値がある。今後、幕府の招聘に応じ来日した清医に関する研究が更に重視されることを期待したいと思う。

本文について、順天堂大学酒井シヅ教授のご指導、ならびに松江日赤病院附属図書館・森脇女史のご協力に感謝を申し上げます。

(1)順天堂大学医学部医史学研究室／北里研究所東医研医史学研究部）
(2)日本医科大学東洋医学科）